

みんな
の
たまり
あそび
むすび

日場



高校生も一緒に！
まちおこしゲリラあおぞら組による
旗振りウェルカム活動(6頁)

特集

地域で「宝物」を育む！

- 株式会社とやけの花（宮城県石巻市）
- 社会福祉法人悠和会（岩手県花巻市）
- 昭和村役場（福島県昭和村）
- 福島市飯坂北地域包括支援センター（福島県福島市）

先進的实践

- 男女共同参画と災害・復興ネットワーク
- まちおこしゲリラあおぞら組（青森県大間町）

レポート

2015年度「立ち上げ支援講座」に延べ729人が参加！

東北探訪

③キク子さん(93歳)との約束／岩手県山田町
地域支え合い活動・事業立ち上げ相談支援センター
センター長 酒井 保



地域で「宝物」を育む！

2015年、5ステップに分けて開催してきた「支え合い活動や生きがい仕事、生活支援サービス事業の立ち上げ支援講座」の最終ステップが、2016年2月21日（日）に仙台市内で開催されました（主催：全国コミュニティライフサポートセンター）。講座では、先進事例の実践者とともに受講生が取り組みを発表し、1年間の成果が報告されました。紙面を通じて、多様な取り組みとヒントをおすすめさせていただきます。

自分の価値を信じてもう一花咲かせられる寄合処を目指して

株式会社とやけの森（宮城県石巻市） 代表取締役 日野宏敏さん

知恵や技は 身体が覚えている

施設で介護の仕事をしていた日野宏敏さんは、「株式会社とやけの森」を立ち上げ、2010年4月に農家の中のデイサービス「とやけの森」を開設しました。「利用する人たちのそれまでの暮らしを認識すること」にこだわったデイサービスを運営しています。「お年寄りの昔からの知恵



や技は、身体が覚えています。できないことが増えても、私たちが及びもつかない光るところがありま

す」と日野さん。利用者の明るい笑顔を見て、もっと多くの人たちとこうした活動をしたいと考えるようになったといいます。そのタイミングで2015年4月の介護保険制度の改正により、介護サービスに頼らない地域の力が今まで以上に求められていることを感じ、日野さんは立ち上げ支援講座を受講しました。

役割をもって まわりの人と関わる暮らし

講座受講後、お年寄りの力と技を借りて地域のつながりを深めるべく、2015年6月1日に寄合処「とやけの花」をオープンしました。ここは、地域に暮らし人が集まって、物づくりをお互いに助け合い、自分の役割をもってまわりの人と関わる暮らし

をすることを目的にしています。開所は月、水、金曜の週3日。利用料金は1,500円（昼食は別途500円）。現在は高齢の女性2人がレギュラーで利用し、草むしり、習字、クラフト編みなどを行っています。かつてはほとんどの家で行われていた味噌づくりですが、とやけの花のある地域で続けていたのはわずか4軒。それを復活させようと、麴をつくり、道具を借りてつくり方を教

わり、近所の人や若者に手伝ってもらいながら味噌づくりを始めました。できあがった味噌は、デイサービスの敬老祝いの



品になりました。クラフトづくりでは、身近な生活道具をつくることで、お年寄りの誇りが蘇りました。目の不自由な人とつくり方をすぐに忘れてしまう人が、一緒にかご編みを楽しむ姿も見られます。ほかにも、医療や介護の勉強会、関東からの田植え体験ツアー、若者と子どもを呼び込む手づくりのピザ釜でのピザ焼きなどをとおして、「他地域の人と交流することで、自分たちの地域のよいところにも気がつくことができました」と日野さんは言います。

とやけの花は、誰もが自分の価値を信じてもう一花咲かせられる、そんな寄合処を目指してこれからも挑戦を続けていきます。



制度や地域資源を組み合わせて地域づくりを

社会福祉法人悠和会（岩手県花巻市） 事務長 高橋和也さん

あのおじさんに もう一度笑ってもらいたい

社会福祉法人悠和会は、花巻市で主に介護サービスを実施する事業として2001年に設立されました。2004年には障害者の就労支援事業を開始して、現在は特別養護老人ホームも含めて、1日約120人が利用する高齢者介護支援の複合的な施設です。

障害者の就

労支援では、田んぼや水耕ハウスを使い、食品加工場では餃子や焼売の製造をしています。あるとき、「うちのリンゴ園地を使ってくれないか」という相談を受けた悠和会は、その農家と連携した取り組みを始めることになりました。



高齢によりリタイアせざる得ない

農家からの相談の背景には、高齢化、後継者や担い手不足といった課題があります。事務長の高橋和也さんは、「農家にお邪魔すると、そのおじさんがものすごく深いため息をついた。最後のため息で終わるのではなく、もう一回笑わせてあげたい」という思いがきっかけの1つだったと振り返ります。

生産だけでなく、 オリジナルの加工販売も

法人は、引き受けることで、担い手不足や労働力の解消、生産量の増加で利用者の所得向上につながるという一定の効果は期待できましたが、生のリンゴの生産販売だけでは存続は難しく、リンゴの加工品の開発に取り組みことになりました。



そこで、県の工業技術センターと相談をして、2014年2月に国の六次化認定を受けて設備を整備し、3品種のりんごを使ったシールドという飲料を開発しました。無添加で着色料などもいっさい使わず、ほかとの差別化をはかるためにノンアルコールにこだわりました。「いわて希望ファンド」の採択を受けて商品化にこぎ着けて、2015年12月に販売を開始しました。

社会的弱者をかけ合わせて 強みを持ち寄る

こうした取り組みは、実は花巻の地域課題の解決でもありました。「地域や地域には『若者がいない』『仕事がない』と、『ない、ない』とばかり言われる」と高橋さん。「そこにいる高齢者と障害者、いわゆる社会的に立場の弱い人たちの強みを持ち寄ることで、何か新しい価値を生み出せないかと取り組んだ」と言います。

「高齢でリタイアしたい」と言った農家も、高橋さんたちが園地でがやが

やとしていると気になるのか、外に出て来てくれるようになります。高橋さんは、「あの子は今日は来ないの?」と聞かれたり、「おまえらじゃ駄目だから手伝わ」と言って一緒にやってくれるようになったと話します。繁忙期には悠和会がアルバイト代を出して、地域の高齢者に手伝わってもらったこと



もあります。

「制度や地域にある資源をいろいろな形で組み合わせて地域づくりをしていきたい」「なりわいをおして人とのつながりの再生をしていきたい」。高橋さんから未来に向けた力強いメッセージをいただきました。

5年後、10年後の村の未来を見据えて

昭和村役場（福島県昭和村） 保健福祉課係長 五十嵐敏幸さん

人と仲良しグループに 焦点をあてる

福島県昭和村は、中山間地域で標高400〜800メートルの間に集落が点在しています。人口は1,347人で高齢化率は55%です。

介護保険制度の総合事業に取り組むにあたって、保健福祉課係長の五十嵐敏幸さんは、『人』と『仲良しグループ』に焦点を当てて、1年間、取材という形で地域に入りました」と話します。

今できていることを そのまま続ける

五十嵐さんたちが発見した、昭和村ならではの事例があります。

1つ目は、新聞受けのコミュニティです。昭和村では、一部の集落を除いて新聞の個別配達が行われていません。集落ごとに集合型の新聞受けがあり、毎朝8時15分ごろに新聞の販売店が新聞を入れていきます。集落の人た

ちは、この時間になると新聞を取りに来ますが、そのついでにコンクリートのところに座って村の話や困りごとの話をする井戸端会議をする場にもなっています。新聞を取りに来ない人がいれば、「今日は〇〇さんはどうして来ないのか」と心配になり、近所の人が新聞を持って行くという安否確認にもつながっています。



2つ目は、昭和村に3軒あるお店のコミュニティです。お店のなかには必ず休憩場所があって、ここで自由にお茶飲みをします。買い物もしたついでにお茶飲みをするのではなく、お茶飲みに来たついでに買い物をするのです。

買い物に来られない人は、この店の人が車で迎えに行き、買い物をしてお茶飲みをしたあとに車で送り届けます。

五十嵐さんは、「店主は、品物を配達するのは簡単だけど、お店に来て自分の好きなもの、ほしいものを選ぶという楽しみや自由さが必要なことがわかってきているから、こうした気配りにつながっている」と話します。



3つ目は、お茶の間の寄り合いです。「キュウリが採れたから」「イモが煮えたから」など、ちょっとしたことをきっかけにして女性たちが集まり、多いときには10人にもなりまう。誰かの家が特定のたまり場というわけではない、仲良しの女性たちがお互いの家を行ったり来たりしています。ある女性は、「お茶飲みに大事なのは場所ではなくて、人。楽しい場所をつくる人がいれば、そこがよい場所になる」と言います。福祉的に言えば、これもデイサービスであり、こうしてつづこうことが、結果的に介護予防や認知症予防につながっています。「わざわざ人を集めて、『介護予防体操をしましょう』としなくてもいい。今できていることをそのまま続けられるようにすることが大事」と五十嵐さんは語ります。

5年後、今活動している人の高齢化がさらに進みます。「そのときをどう支えていくかが昭和村としての課題」と語る五十嵐さんは、今日も地域を訪ねて歩いています。



住民の声を受けて、地域の新たな居場所をつくる

福島市飯坂北地域包括支援センター（福島県福島市） 保健師樋口裕子

場面が違っても 同じ課題が

人口28万人、高齢化率26.7%の福島県福島市。福島市飯坂町の6地区のうち3地区を担当するのが飯坂北地域包括支援センターです。飯坂北地域包括支援センターの担当圏域は、人口約8,000人、高齢者人口が約2,800人、高齢化率は約35%です。

同センターでは、通常の業務はもちろんで、介護予防教室や出前講座を行っています。

市の委託の介護予防教室では、支所や学習センター、社会福祉法人のデイサービスや会議室等を利用して運動や口腔、栄養等の講座を開催しています。出前講座は、寿会やサロンや女性スクールのなどで、健康に関することや介護保険に関するものなどの講座をしています。2015年度は健康生協と一緒に「認知症サポーター養成講座」も開催しました。

また、飯坂地区にある3つの地域包括支援センター合同で開催した体力測

定会では、介護予防教室を卒業してウォーキングなどの自主活動グループをつくった人たちの再びのつながりの場となりました。体力測定会のあとは、減塩の豚汁をつくって食べるイベントで交流を深め、漬けものやくだものやおにぎりが持ち寄られた盛大な試食会になったと言います。

こうした活動をしていくなかで、「場面は違っても同じような課題が出てくることに気づいた」と同センターの保健師、樋口裕子さんは言います。「地域の人たちがつどえる場所がほしい」「高齢者だけではなく子どもと一緒に何かをしたい」「もしものときにすぐに助け合う関係性を日ごろからつづけていきたい」など、たくさんの声がかえってきました。町会長や民生委員からは、「いろいろな職種の人たちをまじえた話し合いをたくさんして、その結果をきちんと行政に要望していきたい」という意見もありました。

「やってみたい」を 声に出す

そこで、同センターでは、2016年度の事業に住民の声を反映することにしました。介護予防教室では、運動だけでなく調理実習や食事を企画しています。認知症サポーター養成講座では、ほかの法人や学校、企業なども一緒にやっていきたいと考えています。

また、新たに包括を運営する法人のデイサービスで、第2・4土曜日に「桃の里サロン」というサロンを企画しています。地区の住民であれば、子どもから大人まで誰でもつどっておしゃべりができる場所です。この背景には、地元で2つある老人会のうちの1つが、役員の高齢化と後継者不足のために解散すること、福島市の介護予防事業が2015年度で一区切りとなり、継続できない地区でのつどえる場所づくりが急務だということがあります。

樋口さんには、いろいろな「やってみたい」という思いがありました。思

いついたことをメモして、まわりに話していくことで少しずつ形になってきたと言います。「自分が楽しいと思えることならば前向きに考えることができます。□にすると、「一緒にやってみたい」と、仲間ができました」と言います。樋口さんのアイデアで地域がどう変わっていくのか、今後の展開に期待しています。



先進的実践の紹介

「立ち上げ支援講座」第5段階では、国内外で活躍する「男女共同参画と災害・復興ネットワーク」と、ユニークな取り組みで注目を集める青森県大間町の「まちおこしゲリラあおぞら組」の発表があり、受講生は多角的な視野とアイデアを学びました。

先進的実践

男女共同参画と 災害・復興ネットワーク



代表／前千葉県知事
堂本暁子さん

同ネットワークでは被災地の声をもとに要望活動を続け、復興基本方針に、男女共同参画についての12項目を盛り込む成果を得ました。

現在、あらゆる政策決定の場への女性の参画の重要性と防災・復旧、復興、さらにはレジリエンス（回復力・復元力）の構築にかかわる政策に男女共同参画の視点を導入することを中心に、日本政府・国会議員に働きかけ、国際的舞台においても多層にわたる政策提言の活動を続けています。「平時から防災に強い地域社会をつくること」が目標。それは、誰もが自分らしく暮らせる社会でもあります」と堂本さんは話します。

「男女共同参画と災害・復興ネットワーク」は、東日本大震災後に全国47都道府県の女性団体・個人が参加して結成したネットワーク組織です。その発端は、震災後、国の「復興構想会議」が公表した「復興構想7原則」の中身でした。健康・福祉・環境・教育などソフト面の生活復興の視点が弱く、男女共同参画や障害者に関する記述がまったくなかったことから、

先進的実践

まちおこしゲリラあおぞら組 （青森県大間町）



組長
菊池良一さん



組員
間山 創さん

マグロの一本釣りで有名な、本州最北端にある青森県大間町。この町がNHK朝の連続テレビ小説「私の青空」のロケ地に選ばれたことから、これをまちおこしにつなげようと2000年に結成されたのが、「まちおこしゲリラあおぞら組」です。主力メンバーは11人。

主な活動は、港で旗を振ってフェリーのお客様を出迎える「旗振りウェルカム活動」、ホームページでの大間町の情報発信、オリジナルの「マグロTシャツ」の販売促進（増殖活動）、マグロ祭りの開催、こいのぼりならぬ「マグロのぼり」の販売促進など。「おもしろがる心」を大切にして、「理屈こねる前に、まんず動け！」「人の心に火をつける！」を信条としています。その結果、地元の大間高校の女子グループが、「私たちも旗振りウェルカム活動をしたい」と仲間に加わるなど、郷土愛と後継者育成の輪が広がっています。2代目組長の菊池さんは、「アホを続けて16年。継続は力なり」と胸を張ります。

2015年度「立ち上げ支援講座」に延べ729人が参加！

住民による支え合い活動や生活支援サービスの立ち上げをあと押し

住み慣れた地域で暮らし続けるための「支え合い活動や生きがい仕事、生活支援サービス事業の立ち上げ支援講座」は、開講して3年目を迎えます。今年度は5段階のプログラムを組み、計34講座を開催しました。

講座では、延べ43の支え合い活動を実践報告しましたが、うち38事例を受講者が親しみやすい東北地方の活動事例にしたことも今年度の特徴です。具体的に事例をひも解き、住民主体の支え合い活動に対する視点を整理して伝えることで、改正介護保険の新しい総合事業に関わる行政・地域包括支援センター・社会福祉協議会・NPO職員など、支援側にいる受講者の高い関心に応えることができました。

なかでも第1段階は、岩手県・宮城県・福島県の3県16会場で開催し、昨年度の1.25倍の受講者を得て、地域支え合い活動の意義と先進事例を学ぶことができました。また、今年度新設した第4段階は、第3段階修了者55人中、約半数の28人が受講し、県内全域での情報交換や活動の交流が進みました。あわせて、「支え合い活動・事業立ち上げ支援センター」を設置し、アドバイザーが3県の受講者の活動現場に出向いて助言や企画立案、実施上の具体的な支援を行うことで、受講者による活動の立ち上げを支えることができました。



研修講座の開催(27/8/22~28/3/12開催 34講座) 延べ受講者729人

第1段階			第2段階		第3段階	
開催地	会場	参加者数	会場	参加者数	会場	参加者数
岩手県	盛岡(8/22)	16	釜石(10/31-11/1)	13	釜石(12/19)	11
	陸前高田(9/5)	47				
	釜石(9/12)	24				
	宮古(9/16)	13				
	久慈(10/10)	11				
宮城県	大崎(8/23)	43	仙台(11/21-11/22)	26	仙台(12/20)	18
	石巻(9/6)	14				
	気仙沼(10/5)	21				
	岩沼(10/9)	30				
	仙台(10/24)	21				
福島県	郡山(8/29)	27	二本松(12/5-12/6)	20	二本松(28/1/24)	13
	相馬(10/3)	41				
	会津(10/4)	24	会津(11/14-11/15)	19	会津(12/23)	13
	いわき(10/15)	10				
	福島(10/20)	63				
二本松(10/25)	17					
小計		422		78		55

第4段階		
(H26年度修了者対象)		
岩手県	釜石(9/13)	3
宮城県	仙台(9/19)	3
福島県	二本松(9/20)	4
小計		10
(H27年度受講者対象)		
岩手県	釜石(28/1/31)	2
宮城県	仙台(28/2/13)	13
福島県	二本松(28/2/14)	13
小計		28

第5段階	
仙台(28/2/21)	17
小計	17

昭和村現地視察		
福島県	昭和村(9/26-27)	63
小計	63	

追加特別講座① (集い場の立ち上げ方)	
仙台(28/3/12)	37
小計	37

追加特別講座② (関係者協議の進め方)	
仙台(28/3/12)	19
小計	19

第1～5段階受講生の住所地別受講状況
(現地視察・特別講座参加者は除く) 延べ人数 n=610



酒井センター長のご近所
東北探訪

③

キク子さん(93歳)との 約束／岩手県山田町

地域支え合い活動・
事業立ち上げ相談支援センター
センター長 酒井 保



岩手県山田町豊間根地区。「ふれあいサロンのような“集いの場”をつくりたい!」と、そのキッカケづくりを意図とした研修会のお手伝いをさせていただいたのが、昨年(2015年)の2月28日。

「堅苦しい講演会みたいな内容では、なかなか参加してくれない。面白くて、楽しい研修会でない」というのが、研修を企画する側に立つ山田町社会福祉協議会の要望。

「たとえば、どのような?」「落語とか、漫談のようなものがいいと思います」……得意分野である。

自治会の役員さん、民生委員さんらに交じって、地域のお年寄りの皆さん22人が集まった。「それでは、ただ今より……」という堅苦しい挨拶のあとに、私の落語・漫談的研修会が始まった。

関西と東北の“笑いの温度差”を感じながらも、そこそこの笑いをいただきながら、「支え合い」について、お話しさせていただいた。

役割を終えて、ガラガラと帰り支度をしている私に社会福祉協議会のスタッフが、「キク子さんが、酒井さんと握手をしたって」と声をかけてきた。

キク子さんは、私の手を握り、「いやあ、面白かった。勉強になった。あれ(3.11)以降、いろんな人が、いろんなところからやって来て、それぞれ“かゆいところに手が届く”ようなことまでしてくれて。ありがたいとは思うけど、やっぱり、この年になっても、できることは自分でやんなきゃな」

「キク子さん、失礼ですがお歳は?」

「アタシかい?今年で93歳だ」

「キュウジユウサン!」

「そだよ。アタシ面白いから、また来て下さいね。必ずだよ!で、いつ来てくれる?アタシも93歳だよ。早く来ねえと死ぬぞ!」

そう言って私の手をギュッと握るキク子さんの手は、力強く、とても温かかった。芝居染みた言い回しに聞こえるかもしれないが、心からそう思った。



豊間根仮設住宅



豊間根公営住宅